

MIDNIGHT UPRIGHT

飯島早苗

〔著〕

● 自転車キンクリット

スーザンハーバート〔英文対訳〕

MIDNIGHT UPRIGHT

JITENSHA KINKURITO vol.11



TAKAGOYAKI-THICK OMBILET

¥2200 NOVEMBER 21(wed) - 10(thu) 1988
KINOKUNIYA HALL at SHINJUKU

MIDNIGHT UPRIGHT

JITENSHA KINKURITO vol.11



TAKAGOYAKI-THICK OMBILET

¥2200 NOVEMBER 21(wed) - 10(thu) 1988
KINOKUNIYA HALL at SHINJUKU

MIDNIGHT UPRIGHT

JITENSHA KINKURITO vol.11



TAKAGOYAKI-THICK OMBILET

¥2200 NOVEMBER 21(wed) - 10(thu) 1988
KINOKUNIYA HALL at SHINJUKU

MIDNIGHT UPRIGHT

JITENSHA KINKURITO vol.11



TAKAGOYAKI-THICK OMBILET

¥2200 NOVEMBER 21(wed) - 10(thu) 1988
KINOKUNIYA HALL at SHINJUKU

モダン
クラシック
フレイズ

⑤

MIDNIGHT UPRIGHT

飯島早苗

英文対訳 ● スーザン・ハーバート

京 晋之佑——若い侍

瀬川 ききよう——晋之佑の許婚者

みなも——晋之佑のかつての恋人

騷乱尼——矢阿連寺の尼

でん念——矢阿連寺の小坊主

まん念——
〃

十六夜——江戸吉原、花魁奉行

はぎの——吉原の遊女

かえで——
〃

りんどう——吉原の禿かむろ

上様——將軍

菊江——晋之佑の妹 大奥の女中

上手の局——大奥の女官

下手の局——
〃

亀千代君——若君

樋渡 真司郎——晋之佑の友人

立原 徳之進——〃

淵田 岩之介——〃

飯島 早太郎——〃

おまき——ききよの友人

おはる——〃

おきみ——〃

おくら——〃

口上師甲——長崎・丸山の見世物小屋の呼び込み

口上師乙——〃

とく——吉原に遊びに来た町人

いわ——〃

ひい公——〃

侍 1——公儀の侍

侍 2——〃

侍3 — 〃

女1 (はるか) — 現代の恋人たち

男1 (信美) — 〃

女2 (マキ子) — 〃

男2 (優二) — 〃

女3 (佳子) — 〃

男3 (真司) — 〃

〈オー・フニンゲ〉

かすかに聞こえる虫の音。

緞帳にうつる月。

風にゆれている芒の影。

虫の声、だんだん増えていく。

客席を取り囲むように響く。

虫の声、頂点に――。

と、ポーンというピアノの音。

虫の声、パタリと止む。

暗闇。

ピアノの音、もの悲しく一小節ほど続く。

突然、英語のアナウンスが入る。

“Ladies and Gentlemen! May I have your attention. Please! I’m very proud to introduce to this wonderful audience the splendid, the awesome the one and only theatrical company in Tokyo Jitensha Kinkurito with their block buster entertainment spectacular <Midnight Upright>!”

明るいミュージカル風の音楽。
織帳があがる。

侍たち、小坊主たちが、剣の稽古をしているダンス。



〈セント・エルモ号〉

はるかな暗闇。満天の星。

ひとり天を仰いで佇む女。

まるで、宇宙の中にいるようにみえる。

一台のアップライトピアノ。ピアノの音。

女
▼

船内気圧正常。船内重力正常。航行軌道不明――。

地球を離れて、どのくらいたつのでしょうか。生命の存在する新しい星を求めて、人々がまだ出会っていない別のいのちのある星を捜して、二人乗りの宇宙船セント・エルモは出発しました。

地球からの宇宙船には、若い恋人たちが乗り組んでいました。いつの日か、宇宙のアダムとイヴになれる時を目指して。



けれども、宇宙はあまりにも広く、暗闇はどこまでも深いので、行けば行くほど、若い恋人たちは互いの心が次第に取り戻しようのないところまで離れていこうとしていくのがわかりました。

私とあの人も宇宙船の中でただふたりきりでした。

まだ出会ったことのない生き物への通信音が、絶えず宇宙空間へと送り出されていました。

その通信音は——まるでピアノの音のようでした。

届くあても知れない遠くへ送り出されるピアノの音の中、私は問い続けていました。

「私はあなたが好きです。あなたは私を好きですか。」

——答えが欲しかったのです。あなたの答えを聞くことができれば、まだみぬ星からの答えも返ってくる気がしました。

けれどもあなたは言いました。

「終りにしよう。地球に戻ろう。」

——あなたはそれから言葉を継がず、ピアノの音の通信音に、応信の音は

決して返ってきませんでした。

『うしみつ時のピアノ』とは、はるか宇宙の彼方での恋人たちの物語がつづられた、遠い昔のおとぎ話でございます。

広がっていく空。

降るような星。

女は尼の姿をしている。(騒乱尼)

遠い昔を思い出すように語っているが、星の降る様子に気づき、空を見回す。

〈矢阿連寺・流星雨〉

江戸の街はすれにある寺。空に流星雨が見える。燭台をかざしている騒乱尼、その美しさに目をとめる。

騒乱尼▼

空をご覧なさい。天の河があふれています。夜空を見上げてごらんなさい。

江戸の空に星が降り積つてゆきます。でん念。まん念。

でん念▼

聞いたか、聞いたか。

まん念▼

聞いたぞ、聞いたぞ。

でん・まん▼

お呼びでしょうか、騒乱尼様。

騒乱尼▼

ご覧なさい。江戸の夜空を。

でん念▼

うわあ

まん念▼

おわあ

MIDNIGHT UPRIGHT



でん念▼

星が落ちてまいります。

まん念▼

星がどんどん落ちてまいります。

騒乱尼▼

これが流星雨です。

でん念▼

八百八町に住まう人々は

まん念▼

さぞや痛い思いをしているのでしょうかね。

でん念▼

星が降れば

まん念▼

富山の薬売りと

でん念▼

傘屋がもうかりましょうね。

騒乱尼▼

星たちの住まうあちら側と、私たちの暮らすこちら側が、常になく近づいてきしみ合い、火花を散らしているようです。暗黒の宇宙は、この大地から限りなく遠ざかり、膨張を続けているというのに。

でん念▼

8 光年先、おおいぬ座のシリウスが

まん念▼

11 光年離れたこいぬ座のプロキオンが。

でん念▼

26 光年、こと座のベガが。

まん念▼

70 光年、おうし座のアルデバランが。

騒乱尼▼

いつもより大地に近づいてみえますね。

でん念▼

騒乱尼様、あれをご覧下さい。品川沖の海を。

まん念▼

空の流星雨を映して、海にあかりが点つたようです。

騒乱尼▼

こんな海を見ているとあの夜を思い出しますね。インド洋を越えて、はるか



まん念▼

アジアの国々までやって来た異国の船 セント・エルモ号の沈んだ夜を。
引き裂かれた甲板と、折れた帆柱が燃えあがり、闇の海に浮かびあがるよう
でした。

でん念▼

やがて、人がうめくようにきしんで品川の海にゆつくりと沈んでいきまし
た。

騒乱尼▼

船乗りたちを助けるというセント・エルモの火も、この江戸では彼らを救え
はしなかったのですね。

まん念▼

セント・エルモの火…？

騒乱尼▼

ギリシアの国に、カストルとポルックスという双子の神がありました。嵐に
出会った船を助けるため、彼らが帆柱に点すあかりをセント・エルモの火
と申します。

でん念▼

この江戸の海には、セント・エルモの火は点らないのでしょうか。

騒乱尼▼

あの夜以来、この品川沖の海には一隻の船もやって来なくなりましたね。毎
夜毎夜、闇の中にただ潮が満ち、また引いていくだけですね。船はもう来
ないのでしょうか。

まん念▼

船はきつと次々と闇の中を進んで来ているのです。

でん念▼

見知らぬ世界がなくならない限り、人は船を出さずにはいられないのです。

騒乱尼▼

——流星雨を映した品川の海は、まるで夜空のようですね。

でん・まん▼

はい

おしのびの上様あらわれる。

上様▼

流星雨ですね。

騒乱尼▼

はい。

上様▼

天の川の川開きに打ち上げる、天の花火のようですねえ。

騒乱尼▼

私には、品川沖の海に点るセント・エルモの火に見えます。

上様▼

品川の海に、また異国の船が訪れる日が来るんですかい。

騒乱尼▼

やがて、まもなく……。誰が禁じようとも、幾度禁じられようとも、セント・エルモ号は訪れるでしょう。

上様▼

刀をふりかざしても、時は止まらねえよなあ。

騒乱尼▼

たとえ刀をふりかざす者が立ちふさがつても。

上様▼

よし、わかった!! あんたに誰か刀をふりかざそうとした時は、いつでも助けを差し向けましょう。——私がどんな遠いところにいても。

危い時は派手に合図をして——そうだ、花火でも打ち上げて知らせて下さい。

騒乱尼▼

はい——きつと。

上様▼

私にはできねえことをやってのけてくれる人が、私には行けねえところに行ってくれる人が、出て来てくれるんでしょうね。



騒乱尼▼

はい。

上様▼

よし!! 危い時は花火だぜ。

騒乱尼▼

空と大地がきしみ合つて火花を散らし、星たちはいつも地上に近くあるようです。

まん念▼

何かがおころうとしているのかもしれない。

でん念▼

次々ときつと船はやってまいります。

騒乱尼、でん念、まん念、手燭の火を吹き消す。

暗転。

〈矢阿連寺外・夜這い〉

京晋之佑と友人たち、闇にまぎれてやってくる。いきなり鐘の音。

晋之佑▼

どひー

真司郎▼

うわーっ

岩之介▼

なんだなんだ

徳之進▼

どーした。くせ者か

早太郎▼

であえてあえー

晋之佑▼

しっ、静かになされ、御一同。

一同▼

(一瞬静まる。)

真司郎▼

ほか(黙って晋之佑を殴る)

晋之佑▼

いて